

くらしと協同をたずねて

集落が作った小さな生協～菅浜生活協同組合

岩橋 涼（京都大学大学院農学研究科博士後期課程）

1. 菅浜生協とは

菅浜生活協同組合（菅浜生協）は、福井県美浜町菅浜地区、敦賀半島の西側付け根に位置する生活協同組合である。菅浜地区は 122 戸、約 400 人が暮らしており、集落住民の全戸が組合員となっている。

菅浜生協は、もともと集落の共同販売所として始まった。1925 年 5 月、集落の大半が焼失する大火にあい、昭和初期からその復興として設立されたのが菅浜協同販売所である。その後、1972 年に菅浜生協となった。現在の店舗は、1994 年、共同販売所があった場所の向かいに設立され、2013 年には店舗改装をおこなった。

店舗のすぐ横には菅浜海水浴場があり、夏は多くの海水浴客が訪れる。店舗の利用者は増え、海水浴客のための駐車場整備もおこなうため、夏は忙しい時期である。菅浜海水浴場は遠浅のため、家族連れが多いとのことである。

主な取り扱い商品としては、鮮魚、生鮮食品、加工食品、米類、酒類、缶瓶飲料、日用品雑貨、園芸用品、花野菜苗、炭製品などがある。店舗は、菅浜地区の組合員はもちろんのこと、近隣の丹生、白木地区の人々の利用もある。ただし、敦賀方面へのアクセスが良いことから、敦賀に買い物に出かける人も少なくない。

菅浜生協と地域との関係で大きな影響を与えているのは、関西電力美浜原発の存在である。美浜原発は 1970 年以降、計 3 基

が稼働してきたが、その定期検査に訪れる作業員の存在が、地域経済に重要な役割を果たしてきた。運転停止は、生協の店舗供給高の減少にもつながっている。



菅浜生協外観

菅浜地区では、県の無形民俗文化財に指定されている精霊船送り（8 月 15 日）をはじめとする伝統行事がある。そうした行事の際に開催されるイベントや祭りでは、生協も出店し、抽選会の賞品の提供などもおこなっている。また、毎年秋に開催する生協祭りは、地区内外の人々が訪れるイベントとなっている。

今回の取材では、おもに理事長の梅津良一氏にお話をうかがった。集落全戸を組合員とする菅浜生協が、集落の行事や活動にどのように関わっているのか、集落にとってどのような存在なのか、紹介していきたい。

2. 菅浜生協の取り組み

(1) 菅浜生協の組織運営と商品供給

菅浜生協の組織は、総括・仕入れ支援をおこなう店長、事務職1名、販売員3名の計5名が職員となっている。現在の店長は、敦賀で仕事をしていたが、定年退職後に店長として勤務している。その他、夏には駐車場整理等でパートとして数名が勤務する。理事会は、理事長、専務理事が各1名ずつ、理事3名、監事2名で構成される。現在の理事長である梅津氏は、区長の経験者でもあり、会社勤めをしながら菅浜生協に関わっている。理事長の任期は2年である。なお、毎年2月には、総会が開催される。

店舗の供給高は、2014年度で約1億円である。店舗面積は76坪で、2013年の改装によって、売り場面積は一部縮小した。取り扱い商品は、前述の通りであるが、最近商品販売として力を入れているのが、マルロク醤油である。これは高瀬物産株式会社を通して、石川県金沢市にある(株)ヤマト醤油味噌が製造した商品である。梅津氏によれば、嶺南で扱っているのは1、2軒しかないことから、旅館やホテルにも積極的に売り出していきたいと考えている。

また、福井県民生協の店舗ハーツの商品も扱っており、常時置いているものもあれば、たとえば肉類は、愛農ミート(敦賀)とハーツの肉を曜日を分けて仕入れている。鮮魚は菅浜出身者で、敦賀で居酒屋を経営している鮮魚店が仕入れる。そのほか、夏には、浮き輪や水中メガネ、サンダル、水着を販売するなど、季節に応じた商品も取り扱っている。

ちなみに、店舗のそばには、精米機が設けられていて、この精米機は地区外の人々も利用している。



店舗内の様子
手前は加工食品、奥の棚(右側)は生活雑貨・文具。
さらに奥には、生鮮食品コーナーがある。

また、店舗以外にも、福井県民生協の配送委託として、「たんぼぼ便」という宅配をおこなっている。配達は、毎週火曜午後2時頃～4時頃におこなわれる。現在は、利用者が14、5名程度しかいないが、梅津氏は、店舗に来るのが難しくなる高齢者の増加が予想されるなかで、今後は利用者を増やしていきたいと考えている。

菅浜生協の取り組み、地区の行事、商品の情報などは、毎月発行される機関紙を通じて住民に知らされる。毎月24日の区の集金日に、次月の行事予定等とあわせて、この機関紙が配布される。

(2) 地区の行事・活動と生協

菅浜の行事としては、5月2日の神輿巡行、8月15日の精霊船送り、夏祭りとして千灯祭り・豊年踊りなどがおこなわれている。県の無形民俗文化財に指定されている精霊船送りでは、提灯や折り鶴、花輪で飾りつけをし、供物を載せた長さ8メートル、幅3.5メートルのかや・麦わらでできた精霊船が作られる。この精霊船に使われるかや・麦わら刈りは、地区の青壮年会を中心におこなわれる。精霊船は、念仏が流

れる中、漁船にひかれて沖へと流され、区民や帰省中の人々が故人との別れを惜しむ盆行事となっている。

この精霊船送りの日に開催されるのが「すかまフェスタ」である。菅浜生協が発行する機関紙によれば、昨年の「すかまフェスタ」では、バンド、五湖太鼓、カラオケ、多くの屋台でにぎわい、生協の出店も大繁盛で、ビールやジュースは完売になるなど、多くの区民や帰省客が訪れた。

また、菅浜では、地区の有志で構成される「炭焼きの会」によって、区内の山林の木を利用した炭焼きがおこなわれている。この活動では、小学生を対象とした炭焼き体験もおこなわれている。もともとは旧菅浜小学校の生徒の炭焼き体験であったが、2015 年 3 月に廃校となったため、今年度は地区の子どもが通う美浜東小学校の 3、4 年生を対象に実施された。小学生は、のこぎりによる丸太の切断、炭材の窯入れ、できた炭の箱入れを体験した。なお、炭焼き窯で作られた木炭は、菅浜生協で夏のバーベキュー用として、販売されている。



炭焼き窯で作られた木炭

（3）生協祭り

地区の行事だけでなく、菅浜生協では、秋（2015 年は 10 月 18 日）に、生協祭りを開催している。生協祭りでは、抽選会の

ほか、衣料品、魚類、へしこ、野菜・果物、手作りパン、焼き鯖、焼きイカ、そば、ラーメン、コロッケ、ケーキ・コーヒーなどが販売され、ハーツも出店している。この生協祭りには、地区の壮年会、婦人会等が積極的に関わっており、理事長も毎年、そば打ちをおこなっている。

また、生協の店舗の一角では、医療生協による健康チェックとして、骨密度や血管年齢の測定等も実施された。



生協祭り
（写真提供：菅浜生協）

3. 原発と集落をめぐる状況の変化のなかで

これまで述べてきたように、地区の全戸を組合員として運営されてきた菅浜生協は、集落の行事や活動と深く結びついた存在である。一方で、店舗の経営をめぐることは、外部の利用者が欠かせない側面もあった。それは、夏の海水浴客であり、原発が停止する前は、定期検査に訪れていた作業員である。梅津氏によれば、美浜原発には常時作業員が 1000 人ほどだが、毎年実施される定期検査では 3000～4000 人が訪れ、60 日～90 日間滞在する。菅浜の民宿に宿泊し、また周辺地域や敦賀にも宿泊してい

た。原発が運転を停止したことで、こうした定期検査に訪れる作業員の利用がなくなった。菅浜生協は、昨年度には赤字を計上するなど、経営は厳しい。原発をめぐることは、3基あるうちの1号機・2号機は廃炉が決定したが、残りの原発の扱いは、いまだ先が見えない状況にある。

菅浜地区内部の変化も生じている。少子化によって、全校生徒15～20人ほどで推移していた菅浜小学校は、前述のように2015年3月に廃校となった。菅浜では戸数自体はほとんど減っていないが、若い世代には仕事を求めて出ていった人も多い。菅浜に住んでいても、敦賀で仕事をし、そちらで買い物を済ませてしまう。こうしたなかで、生協の必要性を含め、若い世代にいかに関心を持ってもらうかということが課題の一つとなっている。高齢化も進むなかで、宅配の「たんぽぽ便」のような取り組みや、マルロック醤油といった新たな商品販売を通じて、利用拡大をめざす取り組みが続けられている。

4. 菅浜にとって 生協の存在とは

菅浜生協は、地区の共同販売所から始まり、全戸を組合員として地域とともに歩んできた。ただし、前述のように、生協は組合員以外の利用に支えられてきた面もある。こうした生協のあり方に対しては、かつて、周辺地区に組合員を拡大しようという提案もあったが、組合員からの反対があり、結局は実現しなかった。いま、菅浜の内部／外部の利用が減少するなかで、生協と組合員の関係、店舗のあり方をどのように考えていくかということは、重要な課題となっている。

なぜ菅浜生協の職員になったのですかという問いに、「育ててくれた菅浜に、何か役に立てたらいいなあと（思って）」と語ったのは、25年勤めた母親の後を継いで2年前から勤務する事務職員である。理事長を含め、こうした思いが菅浜生協を支えている。菅浜生協では、子どもが来れば、どこの誰かすぐにわかるので、声をかけたり話をするという。カートを押しながら買い物にくる高齢者にとっては、徒歩で行ける生協の店舗の存在は重要であり、買い物は家から出るきっかけにもなる。取材時には、買い物に訪れた女性が、職員と楽しげに会話する様子が見られた。この菅浜という集落に根付いた生協が、原発を含めた地域の問題と向き合いながら、今後も地域の人をつなぐ拠点であり続けることを期待したい。



田中秀穂店長、梅津良一理事長、職員の皆さん
(左から)